工人パンフレット——I

特242
968

貧乏人と金持

小池四郎著

社團法人 日本工人倶樂部出版部

0020483000

0020483-000

特242－968

貧乏人と金持

小池四郎・著

日本工人倶楽部出版部

昭和2

ADB

特242
968

金持と貧乏人

内容

▽貧乏人は恥づべき何物をも持たぬ
▽奢侈品生産による民衆の負擔
▽企業の競爭による浪費と民衆の負擔
▽人口と貧乏との關係
▽貧乏人同志には國際間の戰爭はない

金持と貧乏人

小池四郎

貧乏人は恥づべき何物をも持たぬ

讀者よ！筆者は貧家に生れた四男坊である　筆者が相當物心のつく頃ほい迄　いつもいやでいやで　そして引目を感じてゐた事は　なぜ僕の家はこんなに貧乏なんだらう　と云ふ不滿と苦惱の感念に脅かされてゐた事である。このマイナス的な印象は甚しく强烈なものであつたらしいので　未だに其時々の苦々しい　そして今考へて見れば滑稽な程の挿話を　はつきりと頭の底に覺えてゐる。あの頃は學生帽の型が色々と一年毎に流行變轉して行つたもので　筆者の學校仲間（小學校時代）の大抵は　その流行につれて新しい型のい〻格恰の帽子を被つてゐたが　筆者の家では　仲々買つてくれるどころではない　數年の

間は不格恰な古い型の帽子をかぶつて我慢させられたものである　それが何とも云へない引目を感じさせて　密に小さな胸を痛めたものであつた　中學になつてからも　洋服はいつも兄のお古と相場がきまつてゐた　身につかないダブダブのものを着せられて行く事が如何にも氣がきかない樣で　所謂昔の言葉で貧乏臭くつて　それが何とも云へない心のわだかまりであつた事を　未だに思出しては苦笑を禁じ得ないのである。子供心ながら誠に卑屈な心持ち　それが筆者の前身であるかと思ふと誠に汗顏の至りではあるが　少なくも筆者の當時の一貫した苦惱はそれであつたのである。

此の體驗の心持を顧みて　それが非常に興味ある事實の一つのシンボルであると筆者は考へる　と云ふのは　その當時の一般通念が　貧乏を無能力や敗殘の受けねばならぬ當然の報酬で　あるとしてゐた事を　それによつて明瞭に察する事が出來るからである　金持であると云ふ事はとりも直さず才能の優れたもの　從つて尊敬すべきものと考へられ　貧乏である事は無能であり卑しむべきものと見做されてゐたのである。そう云ふ觀念が一般に抱かれてゐたればこそ　小學生の小さな心臟に流行遲れの古帽子が　苦い毒矢を射込ん

だのであろう　同時に中學生の清純な頭腦に迄　兄貴讓りの古洋服が　囚人の服の樣にも思へたのであろう。

然し乍ら　そうした一般通念は　當時にあつては必ずしもよつて起る根幹のないものでもなかつた　と云ふ譯は　當時に於てはある程度迄　或は寧ろ相當な程度迄　金持が手腕を表はし　富が才能を表はしてゐたからである　手腕あるものが――それには惡賢こい手腕である事も必要であつたが――金を儲け　才能の優れたものが莫大な報酬を得てゐたのは事實である。淺野總一郎と云ふ人が　越後の田舍から天秤棒一つで飛び出して來て　巨萬の富をかち得たと云ふ事は　決して飛び放れた特例ではなかつた　そうした米國式成功の經路――米國でも今日では　成功と云ふ乘合自働車は出ない事になつて終つたが――の是非は別問題として　とにかく手腕才能――惡智慧半分　努力半分の――のある處には　そうした僥倖の道は開けてゐたのである　かるが故に　貧乏は無能と考へられ　生存競爭の敗殘者と見做される譯になるのである。

こうした事は資本主義經濟組織の搖籃時代又はその發育時代に於ては　當然の事象であつて　一面から云へば　そうした觀念が又資本主義制を發達せしめた原動力ともなると云つていゝのである　夫故に當時にあつては　貧乏である事が無能を象徴すると云ふ風に考へる事に　相當の根據があつたとしてもいゝ　從つて貧乏を以て恥づべきもの　金持は尊敬すべきものとする事にも　幾分の理窟はあつたであろう　然し乍ら讀者よ！　それは今日の事ではない　今日は既に時代は全く變つてゐる、そう考へる事の幾分でも許された時代は既に過去の事となつたのである。

然らば　今日の時代とは何であるか？　と云ふと　貧乏人必ずしも無能力者でも敗殘者でもなく　しかも金持必ずしも有爲なる才幹ではないと云ふ樣になつた時代である、遲ればせ乍らも日本の資本主義は　急速度を以て進行して來たが　今日では既に資本主義はその頂上に昇り詰めてゐる、所謂爛熟時代にあると云つて差支ない　從つて　貧乏人は裸一貫ではどんな事をしても金持になりつこはない　今日金を儲けるためには　資本をもつてゐなければどう悶ひても駄目である　所謂生産手段をもつてゐるものだけに　金を儲けさせる樣な組織が　完全に造り上げられてゐる　それであるから　資本をもたない貧乏人は

いくら有爲の才であつても堪能の士であつても　特に大資本家の膝下にひれ伏す樣な犬の樣な眞似をしなければ　到底金持となる事は出來ない　それも小資本では何の役に立たない　反つて大資本家に捲上げられて終ふ許りである　近來小賣商人や　十人位の小人數の職人を置いて仕事をしてゐる家內工業などが　以前にも增して失敗し沒落して行きつゝあるのは　讀者の日日目擊する所と信ずるが　それが小資本の事業家が　大資本家のために壓迫され併呑される眼前の好例である　所謂「中產階級の無產化」と云ふ傾向がそれである、夫故例の淺野總一郎や大倉喜八郎が　今日越後から天秤棒一本で東京に乘り出して來た所で　決して昔彼等が經て來た樣な經路を辿つて　今日だけの富を蓄積する事は不可能の事に屬する　彼等の所謂商才と忍耐と卑屈さを以てして　漸く一會社の重役位が關の山であろう　もう今日では　昨日の素寒貧が今日の百万長者になると云ふ餘地は　我が產業組織の中にはどこにもない　それ程この組織は秩序整然として他人の闖入を許さない樣に出來上つてゐる　そして萬般の種類の產業を汎く抱擁して剩す所がない　彼等今日の大資本家は　彼等自身の利得を擁護するために　成可く新しい人間の仲間入りを拒否しようとする　著しく新闖入者の進出を嫌惡する　そして既成資本家のみで全利得を分配しようとしてゐる　それの一つの現れがトラストでありカルテルである　彼等がこうした新經濟組織を結成する目的は　元來他にあるのであるが　その一つの動機は　新しき闖入者を防止しようとする所にもある事は明白である　夫故に今日の經濟界は資本家は資本家　勞働者は勞働者　事務員は事務員と　キチンと役割が決まつてゐる　それは封建時代の大名　士分　町人と云ふ格が　一定不變であつたと少しも變りがない　今日では資本家と云ふ家柄と　勞働者と云ふ家柄とは　截然と區別されてゐる、それは人間の價値の問題ではない　全く家柄の問題になつて終つてゐる　それは丁度政治界にも同樣な形態の推移を見る事が出來る　今日の書生が明日の大臣參議となると云ふ樣な事は既に昔の夢であつて　今日の時世の形態でない事は　三才の童子でも知つてゐる　政界と云ひ經濟界と云ひ元之れ同根從つて今日の兩者の組織の上に何等變りのあるべきではないのであるが　ともすると　經濟界のみは　今尙一攫千金的の成功の餘地が存する自由の天地であるかの樣に　考へる人のある事は　不思議な事である、こうした慾張つた錯覺を夢みる人が　幻を追つて蠢動し

てゐると云ふ事は　寧ろ滑稽な事と云はねばならない。

話を再本筋に戻して　要するに今日では貧乏人必ずしも無能力者ではないと同時に　金持必ずしも有爲の士でなくなつて來てゐる　と云ふのは　成程我國の資本主義の濫觴時代や發達時代に　大資本家に成上つたものは　假令惡辣の譏りは免れ得ないとしても　とにかく手腕あり才能ある人物であつたに相違ない　が然し　資本主義が爛熟期に這入つた今日では　資本家と云はれるものが大抵は二代目になつてゐる　即ち親護りの財産と地位とを受繼いでゐる資本家である　それ故今日の資本家必ずしもえらくない　否寧ろ　金に甘やかされて育つた彼等は　返つて一人前として通用しない人間が多數であると云ふ事が出來る、從つてその才能を尊重してやる必要は毫もない　事實今日あり剩る財産によつて金持はその息子を最高學府に送る　そして卒業すると直ちに　自身の會社の重役に据へて産業運行上重要な役目を負擔させる　そして有爲の才をもつ貧乏人の息子は　唯生れが貧乏であるが故に　この無能にして不生産的な二代目重役の下に端仕事に齷齪と日夜を送るのが今日の動かすべからざる事實である。

そこで大正十五年の我國に於て筆者は敢て云ふ「金持は恨づべきであり　貧乏人は恥づべき何物をも持たぬ」こう云ふ決議を讀者と共に協贊したいと思ふものである。

以上を序論として愈々本論に取掛る事にしよう。

さて　然らばこうした不合理な事　即ち人間の價値如何に拘はらず　貧乏に生れついたものは　一生貧乏でゐなければならぬと云ふ事　之はどう云ふ原因に由來するものであるかと云へば　それには幾多の原因が伏在してゐる。之を剩すなく論じるとなると優に數百頁を要する大仕事であつて　到底この小冊子などのよくする所ではない　夫故に是處には唯その内の重要な骨子をのみ摘出して　概説するに止める事を餘儀なくされる　そして貧乏の根本的な大原因は　資本家によつて勞働の餘剩價値を搾取される事そのものにある事は　之は貧乏の鐵則として吾々の誰しも知悉する處であるが故に　此の事に就ては是處には事新しく述べないとして　それ以外に動因として働く處の二三に就て　筆者は説明する事を許してもらはう。

奢侈品生産による民衆の負擔

今日事業を企てよう會社を起そうと云ふ動因は　卽ち生産企業の經濟的動因は　唯ひたすら利潤の追求慾　云ひかへれば　それによつて金儲をしたいと云ふ慾望にのみ存すると云ふ事は　既に讀者の先刻承知してゐる所であろう　處でこうした動機で企業をする自然の結果として　不必要なる商品の生産が遠慮なく行はれる事になる　不必要なる商品とは　之を別の言葉で云へば奢侈品　贅澤品と云ふ事になる　吾々の生産力なるものは時代時代によつて限度がある　限られたる生産力の中から奢侈品を生産する資本なり勞働力なりを差引くとすれば　結局必要なる物貨を生産する力に不足する事は當然である　この必要なる物資を生産する力の不足と云ふ事が　直接一般民衆を貧乏にする所以である　例へて云ふならば　我國の一般民衆が常食とする米に不足してゐると云ふ事實は　特に數年來甚しく痛感されてゐる所であるが　そしてそれに向つて各種の對策が講ぜられ實行されつつあるが　然しこうした窮迫の我が産業界に　一方には絹織物業が盛になり　華美な羽二重や絹ハンケチの生産が奬勵され生産が增加されてゐる　鐵道や道路の布設に費用の不足

を訴へ乍らも　寶石や毛糸の輸入は年一年と增額して行く　こうした繼ぎ剝ぐな對比の實例を擧げるならば切りのない事であるが　要するに今日の資本家獨裁の産業組織が　一般民衆の必要品を生産すると云ふ事を全然無視し　只企業によつて生れる利潤をのみ追つて生産を遂行してゐると云ふ事から　必然的に生ずる不幸なのである　民衆こそいゝ迷惑であつて　彼等は安い賃銀や俸給をもらつて高い外國米を買はされ　もつと米の値が安くなればいゝ　もつと米の生産が增加すればいゝと心に思ひ乍らも　傭主たる資本家の命ずるが儘に　色とりどりに艶麗な羽二重製造の工場に　終日終夜の勞働をしなければならないのである、彼等は彼等の日日の勞働力を田を耕やす事に用ゐたいのは山々であろう　そしてもつと多くの米を收獲し　米の値段を下げたいのは山々であろう　然し不幸にも彼等を收容すべき田は今日の我國にはない　彼等が耕して田となすべき土地は　先づそれより先きに開墾すべき資本の投下を必要とする處かその資本が捻出出來ないのが　今日の實狀である　それにも拘はらず上等な羊毛や毛織物を外國から輸入する資金は　どしどしどこからか湧いて來ようと云ふのである　そこで止むなく勞働者や事務員や技手は　心ならずも

自身の生活に何等の關係なき　否間接に自身の生活を低下すべき作用をなす奢侈品製造の工場に　その勞働力を提供しなければならなくなるのである　今日の我國の勞働と資本との生産力が假りに一〇〇とすると　その五割は必要品の生産に利用され　他の五割は奢侈品のために費消されてゐる　この奢侈品のために費消されてゐる生産力を　必要品の生産に轉用するならば　吾々民衆の富は　今日の二倍になる譯である　そして分配の制度さへ公正であるならば　吾々民衆は今日の二倍だけゆつくりした生活を享受する事が出來るになる　云ひかへれば今日の吾々の貧侈が半減すると云ふ事になる。

農林省の發表する處によれば　土地狹少なる我國內地でも　まだまだ開墾して田畑となし得べき土地は相當にあると云ふ　然もそうした未開墾地を開拓すべき資本を　政府が持ち合さない　持ち合したとしてもそれに割宛てない事のために　勞働者をそれに吸收す事が出來ない　そして米麥の增產の速度を早める事が出來ないと云ふ事は　民衆を貧乏から解放する事がそれだけ晩くなると云ふ事になる。

資本主義が生產能力の增加に革命的な飛躍を與へた事は吾々も認める　此の點に於て吾

々は資本主義の貢獻をここまでも讃美するであろう　然しその生產能力の內容に就て吾々が考へる時　貫つた金塊を割つて見ると　中が石ころである事を知つた時の意外のあつけなさを痛感せずにはゐられない　必要品の生產が增加するにつれて一般民衆の脚は　貧乏の沼から一步一步浮き上がる事が出來るのである　時代の民衆にとつて奢侈品であるものの增產は　民衆の貧乏の解放に無關係である許りでなく　寧ろ貧乏を增進させる作用をなすものである。

奢侈品の生產が增進する事は　反つて一般民衆の貧乏を幇助すると云ふ事に就て　尙附加へて說明して置きたい　人或は云ふかもしれない　奢侈品であらうと何であらうと　とにかく產業の範圍が擴大すれば　一般民衆の働くべき仕事の範圍が擴大される　從て失業者の數も減じ　貧乏も緩和されるであらう　夫故に金持が奢侈品に飽くなき嗜好をもつと云ふ事は　一般民衆にとつて反つて幸な事である　こう云ふものがあるかも知れない　然しこれ程間違つた考へは寧ろ恐るべきものであると筆者は思ふ　その所論がもし正しいとするならば　假りに石川五右工門が泥棒の會社を創立したとする　すると職業紹介所は

失業者に此の泥棒會社に就職を紹介しなければならない事になる　が然しこの事が社會の富の增加　貧乏の解放と云ふ事にとつて　どんなに愚かな事であるかは說明の要はない

成程奢侈品の生產に從事する勞働者は夫々賃銀を與へられるであらう　賃銀を與へられる勞働者の數が失業者の數に比して相對的に增加するが故に　貧乏は緩和されると斷定する事は出來ない　貧乏が緩和されるかどうかは　賃銀を受ける勞働者の數が相對的に增加するかどうかには關係しない　或は又その受ける賃銀の高にも關係しない　貧乏が緩和されるかどうかは一つに懸つて　生產物の種類如何にある　即ち一般民衆の生活に實質的に關係ある物を生產するかどうかにある。

話を簡單にするために　我國の全勞働者――それを假りに十人としよう――の半數が米の生產に從事してゐるとする　そして他の半數が擧つて歌舞伎座の出方や下足番になつたとする　歌舞伎座は連夜大入滿員　さぞ繁盛する事だろう　歌舞伎座の重役は膨らむ一方のポケットから幾分を割いて　出方や下足番に期定の賃銀を支拂ふだろう　或は時には大入袋を出して下級從業員を潤ほす事もあるだろう　然し讀者よ！　彼等は賃銀を得た

並々ならぬ賃銀を懷にした　そして彼等が家に歸つて　その賃銀を以て先づ買はねばならぬものは何であろうか？　それは米である　生活必需品である米である　然らばその米は誰が作るか？　他の半數が田を耕し肥を掛けて作つた米である　即ち五人で作つた米を農夫五人出方下足番五人　合計十人で購ひ食はねばならぬ　そこに米の不足が告げられ米の價格は騰貴する　從つて當然彼等十人は共共に貧乏をなめねばならぬ事になる　こうなると米を作る五人の勞働者こそいゝ迷惑である　不生產的な奢侈な生產をする他の五人の同僚が存在しないとすれば　彼等は自から食ふ以上を生產しうる能力をもつてゐる以上　自からの食糧に事缺く事は決してあり得る事ではない　資本家の安價にして輕浮な享樂を充すべき芝居があればこそ　そしてそれに從事すべき勞働者が居ればこそ　彼等五人の農夫は食ふに事欠く樣になるのである　彼等こそいゝ迷惑である　然し乍ら假令不生產的な事業であるとは云へ　それが何等か農夫の生活に關はりあるものであるならば　農夫はそう迄迷惑を蒙らない筈である　之がもしも　大理石と紙氈の上に白粉中毒の千兩役者が居座り廻る歌舞伎座でなく　その代りに安易な活動寫眞――その文化的價値如何は別問

題として　是處では唯現在の事實として――であつたとすれば　事は自ら異るであろう

その際農夫は活動寫眞に打ち興ずる代償として　食ふべき米の半減する事を厭はないか知れない　そうなれば不生産的事業も又一般民衆の生活の上にある價値をもつ事になる譯である　この意味に於て　金持の放蕩息子が自働車を走らせれば　それだけ一般民衆は貧乏となり　藝者が三味線の一バチ毎に　民衆の貧苦はその度を増して行くのである。

しかも不生産的な事業程利潤を擧げる事が容易であると云ふ事實がある　利潤を追ふ事にのみ企業の意義を求めつゝある資本家の慧眼は　決してこの事實を見逃しはしない　かるが故に　彼等は好んで不生産的な奢侈品を生産する事にのみ努力する　一般の生活に必要なる物資の生産は　それが直ちに一般民衆の生活の安危に關係するために　そうしたものの市價に就ては　公衆が組織的にも又非組織的にも　充分の注目を怠るものではない進んでそれに要する生産費如何をさへ深く討究する事を敢へてする　夫故に生活必需品から法外な利潤を生み出す事は　資本家とても　世を憚るだけの見得を持ち合してゐる以上一寸しにくい事になる　こうした遠慮と心配に惱まされ乍ら企業をするよりも　有産階級

を顧客にもつ奢侈品の生産をする方が　彼等にとつて遙かに安易であり有利である　こうした利潤追求慾の關係から　彼等は好んでダイヤモンドを採掘し　待合を經營する　こうした今日の生産形態の傾向の下に　即ち盲目的な統制のない生産組織の下に　民衆の貧乏は益々助成されつゝあるのである。

企業の競爭による浪費と民衆の負擔

以上述べ來つた所は　資本家の企業の動因が單に利潤追求にあつて　企業の性質の生産的不生産的を論ずる事をしない所に　今日の民衆の貧乏が助成されて行くと云ふ事を說明したのであるが　是處に尙一歩突込んで考へて見ると今日の資本家の好んでなす不生産的奢侈的な企業そのものに就ても　尙その遣り方迄も甚しく不生産的である事を考へずにはゐられない　之が又民衆を貧乏のどん底に追ひやる大きな原因なのである　然らばその遣り方は如何なるものであるかと云ふとそれは外でもなく生産の自由競爭である　元來資本主義經濟組織の下の自由競爭なるものは　各種の重要な効用をなすもので　その價値は一

題として　是處では唯現在の事實として――であつたとすれば　事は自ら異るであろう

その際農夫は活動寫眞に打ち興ずる代償として　食ふべき米の半減する事を厭はないか知れない　そうなれば不生産的事業も又一般民衆の生活の主にある價値をもつ事になる譯である　この意味に於て　金持の放蕩息子が自働車を走らせれば　それだけ一般民衆は貧乏となり　藝者が三味線の一バチ毎に　民衆の貧苦はその度を増して行くのである。

しかも不生産的な事業程利潤を擧げる事が容易であると云ふ事實がある　利潤を追ふ事にのみ企業の意義を求めつゝある資本家の慧眼は　決してこの事實を見逃しはしない　かるが故に　彼等は好んで不生産的な奢侈品を生産する事にのみ努力する　一般の生活に必要なる物資の生産は　それが直ちに一般民衆の生活の安危に關係するために　そうしたものの市價に就ては　公衆が組織的にも又非組織的にも　充分の注目を怠るものではない進んでそれに要する生産費如何をさへ深く討究する事を敢へてする　夫故に生活必需品から法外な利潤を生み出す事は　資本家とても　世を憚るだけの見得を持ち合してゐる以上一寸しにくい事になる　こうした遠慮と心配に惱まされ乍ら企業をするよりも　有産階級

を顧客にもつ奢侈品の生産をする方が　彼等にとつて遙かに安易であり有利である　こうした利潤追求慾の關係から　彼等は好んでダイヤモンドを採掘し　待合を經營する　こうした今日の生産形態の傾向の下に　即ち旨目的な統制のない生産組織の下に　民衆の貧乏は益々助成されつゝあるのである。

企業の競爭による浪費と民衆の負擔

以上述べ來つた所は　資本家の企業の動因が單に利潤追求にあつて　企業の性質の生産的不生産的を論ずる事をしない所に　今日の民衆の貧乏が助成されて行くと云ふ事を説明したのであるが　是處に尙一歩突込んで考へて見ると今日の資本家の好んでなす不生産的奢侈的な企業そのものに就ても　尙その遣り方迄も甚しく不生産的である事を考へずにはゐられない　之が又民衆を貧乏のどん底に追ひやる大きな原因なのである　然らばその遣り方は如何なるものであるかと云ふとそれは外でもなく生産の自由競爭である　元來資本主義經濟組織の下の自由競爭なるものは　各種の重要な効用をなすもので　その價値は一

面認めねばならぬものではあるが　それが餘りに極端に利用されると　民衆に甚しい迷惑を及ぼす事になるのである　それは何かと云ふと　極端なる競爭による生產過多と廣告費の浪費とである　勿論生產的產業の方面にも　この事は起り得る事であり　現に起りつゝあるのであるが　生產的商品の生產過多はまだ恕すべき點がないでもない　然し不生產的商品の生產過多に至つては何とも始末の惡いもので　その結果恐慌でも起るとすれば　之は又適面にその尻拭ひは民衆が負擔しなければならない事になる　そしてもつと甚しく一般民衆が望まざる負擔を日常强いられてゐるものは　この廣告費である　資本家は彼等の仲間の商品に打ち勝たんがために　自家の製品の宣傳紹介に大きな費用を投じる　然もその製品たるや殆どその間に本質上効用上の差異はないのであるから　之を消費する所の一般民衆にとつては　決してその競爭の必要は毫も感ぜられない筈である　そしてこうした廣告費は云ふ迄もなく彼等の利潤の內から吐き出されるものではなく　相互の商品の價格に添加される　そして直ちに消費者たる民衆の負擔となる譯である。

讀者は毎月一定期日となると　各新聞の第一頁を仰々しく占領する婦人雜誌の誇大なる

廣告を見るであろう　處であれだけの廣告を掲載するには　都下大新聞であれば少なくも一日八百圓を要する　之を都下十六新聞に掲載し　大阪三大新聞　地方有力新聞二十に掲載するとして　約一万五千圓の廣告費を必要とする　此の雜誌が今假りに發行部數十萬としても（事實十萬の正味賣上部數のあるものは殆ごないであろうが）一部當り廣告費負擔が十五錢となる　主婦之友も婦女界も婦人世界も女性も婦人公論も　何れ劣らず此の十五錢の廣告費をかけてゐる事となる　吾々は五十錢の定價の雜誌を買つて來て讀んでゐるが　その內拾五錢は新聞の廣告を有難がつて讀んでゐるのである、もし吾々が新聞の廣告を讀まずにすむならば　今日五十錢で買ふ雜誌が　三十五錢で當然買える筈である。之を逆に考へて編輯費　印刷製本費　問屋小賣店の口錢　發行元の利益などを通算しても又同じ數字が出るが　吾々の女性は　石川武美や增田義一や都河某の私利追求慾の白熱競爭の爲に　不當の負擔たる十五錢を支拂はねばならぬのである　五十錢に就て云ふならば三割に當る負擔である　それは決して輕い負擔とは云へない　處で今日の婦人雜誌を知る者の誰しも思ふ處であろうが　その何れを見るも殆ご同種同內容である　表紙を破りとつて之

を見るならばそれが婦女界か主婦の友か婦人世界か　その何れかを判別し得る事は至難の事であろう　事程左様に内容が相似たものであり　別に同月同日三種も四種も本屋の店頭に並べてもらふ必要はない筈である　筆者をして云はしめるならば　今日の通俗婦人雜誌は之を二種に分つて發行されれば　それで充分全國の女性の讀書慾を滿足する事が可能であると信ずる「女性」「婦人公論」を高級通俗婦人雜誌として一丸とし「主婦之友」「婦女界」「婦人世界」を又一丸として下級通俗婦人雜誌として發行すれば　それで事は足りる筈である　そして　前者を現在の定價七十錢より引下げて六十錢とし　後者を四十錢として——他少の廣告は必要を認めるとして——吾々の女性は之を手に入れる事が出來ていゝ筈である　吾々は斯して單なる雜誌に就てさへも　既に月に十錢の無役なる浪費を餘儀なくされてゐるのである　それが吾々の貧乏の立派な原因の一つでなくして何であろう。

筆者はここに　唯單に小さな實例をとつたに過ぎないのであるが　悉くの企業凡べて然りで　特に不生産的な奢侈品の生産に就て殊に甚しいのである　然もこうした競爭費用は決してごう間違へても資本家の負擔する處とはならない　之は必ず消費者たる一般民衆に

轉化される事となる　かくして民衆は　要らざる費用を資本家に支拂はされて　貧乏の境地を脱却する事が出來なくなつてゐるのである。

以上は今日の産業組織に何等の統制がないために資本家によつて民衆が止むなく負擔する經費の一つであるが　此の外に民衆同志が互に嚙み合つて共喰ひをする事によつて　民衆が貧乏すると云ふ事が日常の事實として起つてゐる　そしてその原因は矢張り産業の無統制と云ふものに因由してゐる　それはどう云ふ事かと云ふと　資本家の命によつて無役の競爭をしつつある工場の夫夫に　働かねばならぬ勞働者は　事新らしく論ずる迄もないとして　その他の悉くの無産者は　互に其場其場の勝手な仕事に從事して　無産者同志互に利得を奪ひ合ひつつあるのである　そしてその結果は互に共倒れに陷ろうと云ふのである　さらぬだに無産者の事業は　大資本家の常住の壓迫を受け日夜あへぎ疲れねばならぬのに　その上相互に喰ひ合はねばならぬとは　無産者の前世の業程恐ろしいものはない。

吾吾のよく遭遇する事實であるが　魚屋の眞向ひに魚屋が店を開き　盛んにビラや張札をして　前からある魚屋と競爭して見たり　辯護士の數が今日でも一般需要に對して多過

ぎるのに　年年新辯護士が增加して行つたりする事は　結局無產者双方の共倒れに終るより他に行く道はなく　しかもその競爭の繼續する間は　その魚を買ふ人　その辯護を賴む人に競爭費用が輔化される恐がある　辯護士の如きは社會一般の需要を超過して開業してゐるために　各辯護士夫々に就ては御客が足りないと云ふ事になる　それ故珍らしく御客が飛び込むで來ると　無法な料金を請求して辛じて其後何日か何ヶ月かの生活費を稼いで置くと云ふ事をする、漸くにも生活費を稼げる內はとにかく　それさへ出來なくなると廢業の止むない事となる　かくして無產者同志生活を維持せんがために盲目的に手當り次第の職業に着手しては　競爭の結果共倒れに陷る　こうした經路が又民衆の貧乏を促進する一つの行き道となつてゐる。

社會主義經濟組織は　こう云ふ事に一つの科學的な統制を與へ　浪費を最少限度に追い詰めようとする　新しき企畫である　そして今日の自由主義資本主義的制下にあつてはこうした不合理は幇助される許りであつて匡救されると云ふ事が絕對にあり得ないのは云ふ迄もない事である。

人口と貧乏との關係

昨年の我國の人口增加數は八十餘萬と云ふ多數を示してゐるが　こうした積年の增加人口を如何に處理すべきかと云ふ事は　大きな問題であろう　然しこれは獨り日本のみの惱みではなく　各國共多少の數の相異こそあれ　文明國には必ず附き物の難問題なのである　人口の增加率と云ふものは誠に素張らしいもので　それにその人口の生產する富が常に相應して增加して行くかどうかと云ふ事は　少くも此の過去百年の間　幾多の學者によつて論議された處である　そしてある種の學者　例へば彼のマルサスの如きは　人口と富との增加が相應して行かないと云ふ悲觀的な見方から出發して　此の世の貧乏は　人口と富との量の增加の不對等關係から生れたものであると斷定したのであつた　即ち人口許り增加して　富が之に相應に增加しないから結局算術的に考へて　人口一人當りの富が小さなものとなり　それが卽ち貧乏なるものの成立であると　こう云ふのである　この議論は今日でも尙多くの學者によつて信じられてゐる處である　成程常識的に考へて　一家の主

人の収入が増加しない處に　毎年子供が一人宛生まれて行くとすれば　その家庭の家計は立ちぎころに行詰つて　所謂貧の苦しみをなめねばならぬ事は　容易に想像し得られる所であり　人口増加が貧乏を將來すると云ふ論は　常識的に誰にでも其場で納得される所のものではある　然し此の議論を少し深く突め詰めて行くならば　その議論は議論として兎に角事實とは甚しくかけ離れてゐるものである事に氣付く筈である　成程　十を五で割れば二となると云ふ算術が眞理である間は　以上の議論も又眞理であり得るであろう　そして人間が滿足なる生活をなす爲には三を持たねばならぬとすれば　一の不足と云ふ處に貧乏が成立して行く事は何人も否む事は出來ないであろう　然し乍ら讀者よ！　十五のものを五で割れば三となる事も又同樣に數學的眞理であるとは思はないか？　處が今日の資本主義制下に於ては　吾々は事實十しか富を持つてゐないであろうから　二の分け前で心棒させられる吾々民衆は　成程貧乏である事が現在の事實であるとせねばならぬかもしれない　否　一般民衆は事實二さへも分配されてはゐないのである　と云ふのは資本主義制下に於ては　富はかつて一度も均等に配分された事はないからである　云ひ變れば　十の富

が人口數五で割られるのではなくして　十の富の内例へば五だけが　頭から資本家の爲に天引されて　殘りの五が民衆の爲に配分されるのであるから　人口一人當り僅かに一の分け前を授かるのが今日の實狀である　そこに既に富と人口との算術的對比のみによつて貧乏の存在が説明されるものではなく　天引と云ふ樣な稍複雜な經濟的行爲が　その間に介在してゐるものであり　單に人口の増加がその儘貧乏を釀成するものではない事を　讀者は知るであろう　まして今日の富の生産力は決して十ではない　資本主義は吾々のもつ生産能力を全部剩すなく發揮する事はしない　前述した樣な資本主義制特有の不生産的な生産方法　或は其他資本主義制の持前である幾多の原因をさへ艾除し得るならば　吾々は例へば十五の富を生産し得る能力をもつてゐるものなのである　そしてそれを資本主義の天引と云ふ勝手氣儘な分配方法から脱却し得るとしたならば　公平に之を配分して　十五を五で割り三と云ふ分け前を持つ事が出來――勿論人々各その能力に應じて幾分の配分の大少はなければならないが　それは大體に於て三と云ふ結果を大きく動かす程の因數とはならない――吾々民衆はそこに完全に貧乏から逃れる事が出來る事になるであろう。

以上の説明は餘りに概括的であり　餘りに常識的であつたかも知れないが　これには理路整然として科學的に説明する事が出來るのである　然しそれは反つてここに述べるには無味乾燥過ぎ　讀者に讀みづらひ煩を與へる事を恐れ　敢て省略する事にするが要するに　マルクスの産業豫備軍の形成に關する一論がそれなので　即ち資本主義的産業の發展に伴ふ可變資本分と不變資本分との量的割合の變化に因を發し　勞働者は漸次その職業を失ひ　失業者の群が醸成され　そして擴大され　ここに所謂産業豫備軍の形成が起り　俗に云ふ人口過剰の現象が現はれると云ふ所からはつきりと説明する事が出來るであろう――詳しくは　河上肇博士「社會問題研究第七十三冊」又は拙著「非資本主義的人口論」を參照されん事を望む。

要するに人口過剰が貧乏の根本原因であると考へたマルサス　及その後の經濟學者の錯覺は　資本主義經濟組織のからくりを彼等が究明し得なかつた所に因るものであつて　資本主義制下に抑壓せられつつある今日の吾々にとつては　見當違の屁理窟以上には　何等の價値をも齎さないものである　それにも拘はらず　今日に至るも尚且マルサス一流の所

論が一般に信じられつつある所以は　その理論が如何にも常識的で判り易いのと　資本主義の罪過を民衆の眼から糊塗せんとするブルジョア御用學者の詭辯とに因るのであろう　吾々は決してそう云ふ誤れる詭辯に迷されてはならない　吾々は吾々自身の貧乏を救ふために　人口を減少する樣な手段を採つてはならないのである　産兒調節の手段は此の點に於て決して望ましい方策ではない　産兒調節はどこから見ても貧乏の根本的匡救の手段ではない　それにも拘はらず　筆者が折ある毎に産兒調節の必要を論じ　その方法をさへ普及せしめつつある所以は　資本主義制の沒落する迄の間に限つて　各家庭の貧窮を緩和し得る一時的方便としての價値を　それに認めるからである。

貧乏人同志には國際間の戰爭はない

政治と經濟とは姿こそ變れ　元を洗へば之又同根　腐敗せる經濟組織の傍には　腐敗せる政治があつて　兩者相共にもたれ合ひ助け合つて行くものである以上　是處に事更に今日の政治が貧乏を助成しつゝある事實を更めて説明するのも　少々馬鹿らしい氣さへす

る　筆者はこゝに唯一言戰爭に就て說明するの自由を許してもらひたい。

獨り吾國だけに止まちず各國の歲費の內の大きな部分を占めるものは　軍備費である元々一國の軍備はその國の內亂に備へるだけのもので充分である筈のものが　現狀では軍備は全然他國に對するものとなつてゐる　この事は今日では一般國民の常識となつてゐて　その事を怪しむものがない位であるが　よく考へて見るとこの事位不可解な事はないであろう　吾々が野蠻人ならばいざ知らず　少なくも文明人である所の吾々が　唯單なる感情の衝突　そしてその鬱憤の解放のために　國を擧げて戰はうとする程夢中になり得るものであろうか？　自國の國民の一人が他國民のある一人のために遇々殺されたからと云つて　三千萬人の同胞の生命と三千億の財貨とを喜んで捨てる——世界大戰の犧牲は正にその通りであつた——だけの蠻勇を　吾々は果して持ち合してゐるであろうか？　成程吾吾は個人個人の場合には單なる瞬間的の感情の興奮のために同胞と打ち合ひ　時には殺し合ふ事もあるであろう　そうした殘忍さと盲目さとから凡べての人が凡べての場合に完全に脫脚し得る程　今日の吾々は聖化してゐるとは到底考へられないが　國民と國民との間

の單なる感情の齟齬によつて　國民と國民とが互に國を擧げて打ち合はう殺し合はうと決意し遂行すると云ふ愚かな行爲を　吾々は平氣でとる事が出來るであろうか　吾々は幸に自省心をもつ　善後を省察し因果を見拔くだけの聰明さは持合はしてゐるものである　殊に國と國との戰爭の如きは戰はうと云ふ國民心理の興奮的發作とその行動化との間には相當な日子を存するものである　單なる感情の興奮は十日も二十日も發作當初の强さで持續するものではない　必ず日一日とその興奮はさめて行くものである以上　到底そうした簡單にして氣紛ぐれな動機の下に　國を擧げて國の安危を賭して迄戰はうとする譯はない筈である　處がない筈のものがあるのである　事實誰でも經驗した樣に幾度も繰返されたのであつた　それには他に何か深い動因がなければならない筈である　そして事實深い動因があるのであつて　それが又例のくせ物なのである。

事は又經濟の領域に戻る　資本家は夫々の屬する國に於て　資本主義產業組織を確立し發達せしめる　發達せしめた結果愈々爛熟期と稱すべき頂上に上り詰めると　利潤の獲得か從來の樣に容易ではなくなつて來るのである　一層正確に云ふならば　利潤率が減少し

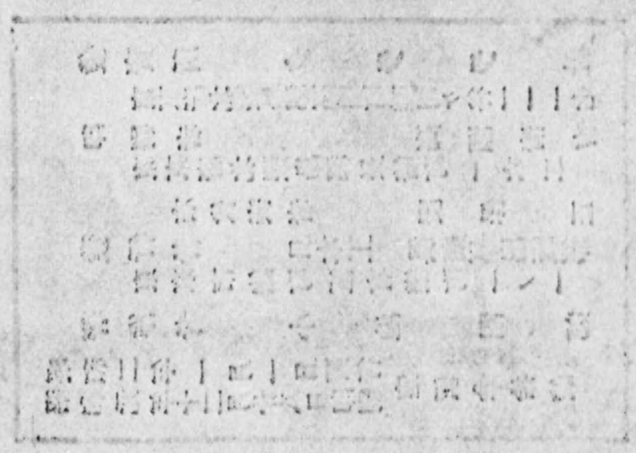
て來るのである　何故そうした現象が起るかと云ふ經路の說明をする事は――これも亦資本の構成內容の割合の變化によるのである――他の機會に讓るとして　とにかく利潤率は減少して來る　そこで彼等資本家は　產業の未發達の後進國に眼をつける　そこに資本を投下して企業を開始し　彼等が自國の資本主義の發達期に儲け得たと同樣の大きな利潤を貪ぼろうと心掛ける。それに又　假令他國の領土內に企業をしないとしても　自國の工場での生產品を他國に輸出し　それによつて一層の利潤を生まそうと心掛ける　即ち海外市場を自國のものたらしめようとあせる　とにかくその前者にしろ後者にしろ　要するに何等かの形に於て他國の領土內に利權を求めようとする事になる　處がある一國の資本家がそうした野望を實現しようとすると　それと全く同じ心理狀態の下に　他の國の資本家も同樣に同じ國のそうした利權を求めようとする　米國が支那に企業し　支那に市場を確立する優先權を求めようとすれば　日本の資本家も米國に劣るまいとして　支那に押しかける　そこに兩國の衝突が起る事になる　この衝突は先きに述べた樣な單なる感情の齟齬ではない　底に根深き利害の打算が橫はつてゐる　夫故にこの衝突は最后は戰爭に迄昂上す

る　しかも戰爭に白熱し乍らも張本人は敢く迄冷靜である　戰ふ事が打算の結果であるからである　夫故この戰爭は決して國民と國民との戰爭とは云へない　それは一國の資本家と他國の資本家との戰爭であるに過ぎない　此の際に資本家は一世一代の雄辯を振ふ　敵は吾國を滅ぼさんとしてゐる　吾々は世界の平和のために　名譽ある祖國のために　そして汝等國民の生命と財產とのために　敵を粉碎せねばならない　そして國難を一掃し威を海內に輝かさねばならぬ　欺かれたる國民は欺かれたとも知らず死を決して戰線に向ふ　そして幸にして戰捷を獲ち得たとして　さて彼等國民の得る處は何であるか？　夫を失ひ子を殺し財貨を破壞して得たる所は　失はれたる一脚に代ゆべき一本の松葉杖ではないか　上官より受くる一片の感狀ではないか！　然るに見よ！　彼等資本家の邸宅を！　戰前の邸宅は打ち壞されて　幾數倍の華麗さを以て樓閣は建てられてゆく　そして廢兵は影の如く力なく彼等の勝手元に鉛筆と齒磨を賣るべく　憐な聲を擧げるのである！

讀者よ！　筆者の拙く短かき以上の叙述によつてさへも　今日の軍備が國民の軍備ではなくして　少數資本家の利潤獲得の手段である事を容易に了解されたであろう　事程左樣に

それは動かし難き事實なのである　かくの如き不都合なる軍備のために　吾々民衆は多大の税を支拂ふべく命令される　乏しき分配　乏しき賃銀や俸給の中から　かくの如き目的のために高き税を追求されつつあるのである　吾々の今日の貧乏は　軍備のためにその位その度を強めてゐるか？　それは蓋し吾々の想像以上のものがあるであろう。

吾々はここに之以上貧乏の原因を擧げる事を控へ　他は讀者の想像に任すであろう　然し以上二三の原因の說明だけによつても　今日の一般民衆の貧乏が　民衆自體の無能力によるものでもなく　又天の命ずる旺盛なる出産力によるのでもなく　それは少數資本家の故意的操作の結果である事を知るであろう　今日に至つては貧乏必ずしも耻づべきではない　否正しきものこそ貧しいのである　欺くものこそ富むのである　今日の子供が　筆者の幼い頃の樣に　貧乏を包み隱すに小さき胸を痛め　强いて金持ちを裝はうと工夫するみじめな眞似をしないですむと云ふのは　彼等にとつて何と云ふ幸の事であろう　正しければこそ貧しいのである　吾々はこの堅き意識の下に安住して　そして正しき明日の世界の建設に努めようではないか！

311
576

昭和元年十二月廿八日印刷
昭和二年一月一日發行　定價金拾錢
著作者　小池四郎
發行者　東京市麴町區有樂町一ノ一
日本工人倶樂部出版部
右代表者　廣保正
印刷者　東京府北豐島郡長崎町一六二
高瀨清吉
發賣所　東京府北豐島郡高田町雜司ヶ谷一一一七
クララ社